

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 29 年 6 月 23 日現在

機関番号：12301

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2013～2016

課題番号：25370576

研究課題名（和文）日本語の配慮表現に関する学習者コーパスの作成と対照研究

研究課題名（英文）A comparative study on the use of consideration expression of Japanese by Japanese native speakers and foreign Japanese learners

研究代表者

牧原 功（MAKIHARA, Tsutomu）

群馬大学・国際教育・研究センター・准教授

研究者番号：20332562

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 3,600,000円

研究成果の概要（和文）：本研究は、日本語学習者の日本語の配慮表現の習得状況を把握する、日本語母語話者の配慮表現の使用状況を調査する、それらを比較し、日本語学習者の配慮表現の習得・運用が母語話者とのように異なるかを明らかにし、その差異が何によって生じているかを検証したものである。これらの研究を通じて、日本語学習者の配慮表現習得の問題点を明確化し、日本語教育に応用可能な日本語の配慮表現の体系的な整理を行った。

研究成果の概要（英文）：The purpose of this research is to (1) grasp the acquisition situation of consideration expression of Japanese learners (2) investigate the use situation of consideration expression of Japanese native speaker (3) compare them and to clarify how acquisition and operation of consideration expressions of Japanese learners differ from native speakers. Through these studies, we clarified the problem of acquiring consideration expression by Japanese learners, and systematically organized consideration expression of Japanese applicable to Japanese language education.

研究分野：言語学

キーワード：配慮表現 ポライトネス 第二言語習得 対照研究

1. 研究開始当初の背景

語用論研究において、20世紀終盤から急速に注目を集めているトピックとしてポライトネスがある。ポライトネスとは、会話における当事者同士の互いの面子を保持する等、人間関係の維持を慮って円滑なコミュニケーションを図ろうとする際の社会的言語行動を指す。これについて Leech(1983) Principles of Pragmatics は、自己と他者に及ぶ利益・負担への配慮に関する7項目のポライトネスの原理を立て、Brown & Levinson(1987) Politeness は、ポライトネスについて、相手のフェイス(社会生活を営む上で他者との人間関係に関わる基本的欲求。面子)を脅かさないように配慮して行われる言語行動と定義した。これらは普遍性のある理論とされるが、個別言語としては英語において関心を集めている状況であった。

日本語においては、1999年の国語審議会第22期第1委員会、「僭越ではございますが」のように相手に遠慮した表現や、「春らしいスカーフですね」のように積極的に相手を喜ばせる表現などについて注目し、これを配慮表現と呼んだ。これらの現象は、ポライトネス理論によって説明が可能なものも多いが、現象より先に説明理論であるポライトネスが先行することにより、日本語におけるこの種の言語現象の多様性、広がり的大小が見落とされているのが現状であった。

本研究の着想を得るに当たり、平成21年度から23年度にかけて取得した科学研究費基盤(C)「日本語の配慮表現の研究とその日本語教育への応用」(研究課題番号21520524、研究代表者：牧原功)により、日本語の配慮表現に関係すると思われる言語現象の収集と分析を行い、その説明理論の一つとしてポライトネス理論の適用可能性を検討すべきことを主張した。上記の研究では日本語母語話者の言語資料を分析することを行ったが、さらに詳細に日本語の配慮表現の表現形態を分析するためには対照研究の手法が有益であると判断した。学習者コーパスと母語話者コーパスを作成し、対照研究によって、これを試みようとするのが本研究の姿勢であり、日本語教育学における言語習得研究としても言語学における語用論研究としても、独創性・重要度の高い研究であると考えた。

本研究の研究代表者及び研究分担者は、2000年頃から個別に日本語のポライトネスに関わる研究を行ってきた。牧原はアスペクトとポライトネスという点に着目し「日本語能力試験、合格した？」という質問に「合格しています」のような動作の完了を表すアスペクトを用いると、「当然合格しましたが知らなかったのですか」のようなニュアンスを持ち、マイナスの配慮として機能してしまう場合が多いことを示し、テンスの「合格しました」を用いると過去の事実を述べることに焦点があるが、「合格しています」を用いると聴者の現在の認識を修正することを迫る働き

があるのではないかと提案した。また、小野、山岡と共に副詞「ちょっと」「まったく」「たしかに」などが聴者とのFTAを回避するために用いられていることを主張した。研究分担者の小野は「話してくれてもいいでしょう?」の「てもいい」が、強い依頼を行う際に相手にかかる負担を緩和する機能など、多様な機能を持っていることを指摘し、これを配慮表現の一つと位置づけた。もう一名の研究分担者である山岡は、依頼という発話行為はどの言語においても相手に負担をかける行為であると指摘し、それを緩和しようとする配慮表現がどの程度普遍的か検証することを試みた。このような研究の積み重ねを経て、2010年に『コミュニケーションと配慮表現』を明治書院より上梓することができた。それらの研究を踏まえ、牧原は配慮表現に関わる文法カテゴリーとして、ボイス、テンス・アスペクト、ムード、取り立て詞などがあること、また発話機能の転用(例えば医療や介護の現場で「起きますよ」のような表現が婉曲な依頼表現として機能するなどの現象)が、配慮表現として頻繁に用いられていると主張した。小野は日本語の引用形式の多様性に注目し、伝聞を含んだ引用の体系化を提案し、例えば、研究室に約束の時間に行ったところ不在だった場合の表現として「今日、この時間にいらっしゃるとおっしゃいましたが」「今日、この時間にいらっしゃるとおっしゃいましたが」「今日、この時間にいらっしゃるとのことだったのですが」といった形式のどれを選択するかが相手に対する配慮表現となることを主張している。また、山岡は海外共同研究者・李奇楠と共同で依頼表現の日中対照研究を行い、依頼表現や禁止表現における配慮の表現の用いられ方を比較している。

本研究は、上記のような日本語の配慮表現の研究を日本語教育の側面から進展させようとするものであった。学習者コーパスを作成し、学習者の配慮表現習得の問題点を明らかにすること、さらにコーパスをもとにした対照研究を行うことによって、配慮表現習得の問題点を明確化し、異なる母語を持つ学習者間での配慮表現の使用形態の違いを明らかにすることを目的とした。

2. 研究の目的

本研究は日本語の「配慮表現」について以下の調査・研究を行うことを目的とした。

まず、日本語学習者の日本語における配慮表現の習得状況を把握するため、いくつかの課題を設定し、配慮表現の使用に関わる学習者コーパスを作成する。合わせて同様の課題による日本語母語話者のコーパスも作成し、学習者コーパスと比較することにより、日本語母語話者の配慮表現の習得・運用の在り方について、対照研究の観点から検討する。さらに、日本語学習者の配慮表現の習得・運用が、日本語と他言語とでの配慮表現の表現形式

の異同や、教師側のピリーフ、学習者の学習ストラテジーとどのように関連しているのかを調査する。以上により、日本語学習者の配慮表現習得の問題点を明確化し、日本語教育に応用できる日本語の配慮表現の体系的な整理を目指した。

3. 研究の方法

本研究は日本国内での研究担当者5名(研究代表者・研究分担者)と海外の研究協力者4名との共同作業として進めた。日本国内の研究グループは、学習者コーパスと母語話者コーパスの比較検討を行い、日本語学習者の配慮表現習得上の問題点を検討した。あわせて、日本語の言語現象の考察と記述をすすめ、日本語の配慮表現の全体像を浮き上がらせ、体系化を図ることを目指した。海外の研究協力者は日本語学習者のコーパス作成のための現地調査の実施と、中国語、韓国語、タイ語における配慮表現の用いられ方の検証を進めた。あわせて自らが外国語学習者として日本語を習得した経験から、日本国内の研究グループの考察の漏れをチェックした。国内の研究者と海外の研究協力者は、少なくとも毎年1回は国際学会への参加や研究集会への参加を行い、意見交換を行った。

4. 研究成果

これまでの主要な研究実績としては、外国人学習者の動詞の自他の選択に関わる研究、引用の形式の使用に関わる研究、外国人学習者のポジティブポライトネスの使用に関する研究、日本語の繰り返し表現に関わる研究が挙げられる。

動詞の自他の選択、引用形式の使用では日本語母語話者の選択との比較を行い、日本語学習者は日本語母語話者が用いるようなポライトネスを高める操作を行う頻度が低いことが明らかになった。ポジティブポライトネスの使用に関する研究では、言語ごとにポジティブポライトネスの運用方法が異なり、その干渉で適切にポライトネスをコントロールできないことを示した。繰り返し表現では、日本語のトートロジー表現が配慮と密接に関わっていることを示した。

現在も、ある発話行為を行う際の構文の選択に関する母語話者と日本語学習者の差異(例えば、相手に行為を促す際、「～しますよ」「～しましょうね」と母語話者が発話する場合でも学習者は「～してください」を多用する等)、教師のピリーフと学習者の配慮表現習得の関わりについて、分析を継続中である。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計12件)

牧原功、日本語の繰り返し表現について - 繰り返し表現の類型化と意味の派生のメカ

ニズムを考える -、日本語コミュニケーション論集、査読無、6号、2017、15-24

小野正樹、呉佩珣、岩崎透、多言語記述を目指した同一語句繰り返し表現の機能について、日本語コミュニケーション論集、査読無、6号、2017、1-12

山岡政紀、配慮表現の習慣化をめぐる一考察 - メタファーとのアナロジーをもとに -、日本語日本文学、査読無、27号、2017、27-38

山岡政紀、配慮表現の習慣化と原義の喪失をめぐる一考察、保護コミュニケーション論集、査読無、第5号、2016、1-10

小野正樹、依頼における配慮表現の研究 - 終助詞「たり」に注目して -、日本語コミュニケーション論集、査読無、第5号、2016、19-27

牧原功、外国人学習者の用いる積極的ポライトネス - メールを例にして -、日本語コミュニケーション論集、査読無、第5号、2016、115-125

小野正樹、言い換えマーカの記述試案 - 言い換え行為の体系的理解を目指して -、日本語コミュニケーション研究論集、査読無、第4号、2015、3-10

山岡政紀、現代日本語配慮表現の記述方法の確立に向けて - 配慮表現データベース構築の基礎論として -、日本語コミュニケーション研究論集、査読無、第4号、2015、57-63

山岡政紀、文機能とアスペクトの相関をめぐる一考察 - 動詞テイル形の解釈を中心に -、日本語コミュニケーション論集、査読無、第3号、2014、1-8

小野正樹、「ありがとう」と「すみません」に関する一考察、日本語コミュニケーション論集、査読無、第3号、2014、35-42

大和啓子、「そうですか」に関する一考察、語用論的考察と使用実態調査 -、日本語コミュニケーション論集、査読無、第3号、2014、53-62

牧原功、配慮表現と動作のコントロール性、日本語コミュニケーション論集、査読無、第3号、2014、63-72

[学会発表](計20件)

牧原功、日本語の繰り返し表現と意味の派生、第8回コミュニケーション研究会、2017年3月1日、創価大学(東京都・八王子市)

大和啓子、ナンカの再定義とその使用効果、第8回コミュニケーション研究会、2017年3月1日、創価大学(東京都・八王子市)

小野正樹、呉佩珣、岩崎透、日本語・中国語・ロシア語における繰り返し表現、第7回日本語コミュニケーション研究会、2016年10月29日、筑波大学(茨城県・つくば市)

牧原功、日本語の繰り返し表現のバリエーション、第7回コミュニケーション研究会、2016年10月29日、筑波大学(茨城県・つくば市)

小野正樹、山岡政紀、牧原功、李奇楠、配慮表現から見た日本語の同一語句の繰り返し発話について、日本語教育国際研究大会2016、2016年09月10日、パリ(インドネシア)

山岡政紀、牧原功、小野正樹、李奇楠、配慮表現における慣習化と原義の喪失、2016年09月10日、パリ(インドネシア) 山岡政紀、李奇楠、牧原功、小野正樹、「批判」の発話について、International Conference on Practical Linguistics of Japanese (ICPLJ)9、2016年06月04日、サンフランシスコ州立大学(アメリカ)

小野正樹、李奇楠、山岡政紀、牧原功、「日本語・英語・中国語の語彙”丁寧”に関する分析 日本語「丁寧」、英語「Polite」、中国語「礼貌」を例に -」、International Conference on Practical Linguistics of Japanese (ICPLJ)9、2016年06月04日、サンフランシスコ州立大学(アメリカ)

山岡政紀、慣習化した副詞句に見られる配慮表現をめぐって、第6回日本語コミュニケーション研究会、2016年1月30日、筑波大学(茨城県・つくば市)

牧原功、日本語学習者のポジティブポライトネスの使用について、第6回日本語コミュニケーション研究会、2016年1月30日、筑波大学(茨城県・つくば市)

小野正樹、言い換え表現から見たトートロジーについて、第6回日本語コミュニケーション研究会、2016年1月30日、筑波大学(茨城県・つくば市)

小野正樹、慣習化された配慮表現の発送、日本語用論学会第17回大会、2014年11月27日、ノートルダム女子大学(京都市)

山岡政紀、慣習化されたポライトネスとしての配慮表現の定義、日本語用論学会第17回大会、2014年11月27日、ノートルダム女子大学(京都市)

牧原功、配慮表現としての注釈表現に関する一考察、日本語用論学会第17回大会、2014年11月27日、ノートルダム女子大学(京都市)

牧原功、動詞の自他と配慮、第5回日本語コミュニケーション研究会、2015年1月23日、創価大学(東京都・八王子市)

山岡政紀、カモシレナイの主観性と客観性、第5回日本語コミュニケーション研究会、2015年1月23日、創価大学(東京都・八王子市)

小野正樹、引用の主観性、第5回日本語コミュニケーション研究会、2015年1月23日、創価大学(東京都・八王子市)

牧原功、山岡政紀、小野正樹、李奇楠、日本語配慮表現研究の課題と展望、世界日本語教育大会(ICJLE)、2014年7月11日、シドニー工科大学(オーストラリア)

山岡政紀、牧原功、小野正樹、現代日本語配慮表現の記述方法の確立に向けて - 配慮表現データベース構築の基礎論として -、International Conference on Practical Linguistics of Japanese (ICPLJ)8、2014年3月22日、国立国語研究所(東京都・立川市)

牧原功、助言における配慮表現 - 母語話者と非母語話者を比較して -、第4回日本語コミュニケーション研究会、2014年2月21日、筑波大学(茨城県・つくば市)

小野正樹、言い換えのコミュニケーション、第4回日本語コミュニケーション研究会、2014年2月21日、筑波大学(茨城県・つくば市)

〔図書〕(計2件)

李奇楠、廣瀬幸生、彭広陸、趙華敏、于榮勝、澤田淳、蔡盛植、山岡政紀、牧原功、金玉任、小野正樹、くろしお出版、言語の主観性 - 認知とポライトネスの接点 -、2016、224(151-171)

佐藤琢三、庵功雄、長谷川守寿、阿部二郎、牧原功、天野みどり、富樫純一、生天目知美、ポリリー・ザトラフスキー、渡辺文夫、木戸光子、石黒圭、アンドレイ・ベケシュ、俵山雄司、砂川有里子、くろしお出版、文法談話研究と日本語教育の接点、2015、348(79-98)

〔産業財産権〕

出願状況(計 件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

取得状況（計 件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕
ホームページ等

6. 研究組織

(1) 研究代表者

牧原 功 (MAKIHARA, Tsutomu)
群馬大学・国際教育・研究センター・准教授
研究者番号：20332562

(2) 研究分担者

山岡政紀 (YAMAOKA, Masaki)
創価大学・文学部・教授
研究者番号：80220234

小野正樹 (ONO, Masaki)
筑波大学・人文社会学研究科・教授
研究者番号：10302340

俵山雄司 (TAWARAYAMA, Yuuji)
名古屋大学・国際機構・准教授
研究者番号：30466685

大和啓子 (YAMATO, Akiko)
群馬大学国際教育・研究センター・講師
研究者番号：60640729

(3) 連携研究者

()

研究者番号：

(4) 研究協力者

()